現代社会における犬が果たす役割
～アニマルセラピーとその可能性について～

飯田恭乃

近年、ドッグセラピー及びアニマルセラピーという言葉が浸透しつつある。しかし、その言葉を聞いて思い浮かぶのは一般的に“癒し”程度でしかなく、犬とのふれあいが私たち人間にとって好ましい効果を与えていることは、まだ漠然としている。ドッグセラピー及びアニマルセラピーは、医療や福祉、教育の現場で活動していることに加えて、犬と一緒に暮らすことでも人間に対して癒し以外の効果があると考えた。しかし現在、日本でのドッグセラピー及びアニマルセラピーの導入は、海外に比べて少ない現状にある。そこで本論文は、ドッグセラピー及びアニマルセラピーが人間に与える影響について着目し、どのような役割を果たしているのかを調べた。その一方で、日本が海外に比べてドッグセラピー及びアニマルセラピーになぜ消極的であるのかに触れ、今後日本でも認知度を高めていくことについても考察をした。

ドッグセラピーを用いた日本での事例は、多様な現場での活動実績がある。それぞれの結果として良い影響ばかりであり、ドッグセラピーの効果はあると言っても差し支えないことが分かった。海外でもドッグセラピーの取り組みが行われており、効果は絶大なものである。欧米を中心にアニマルセラピーについて本格的な研究が続いているとともに、公的に治療として認められていることなどから、海外に比べて日本はまだ発展途上である。発展途上である理由のひとつとして、犬の社会的地位が挙げられる。飼い主の安易な行動やマナーの悪さから、犬と暮らしていない人の中で迷惑であるという意見が少なからず存在する。その点、海外では人間と犬が同等の社会的地位であること、犬に関して数々の法律が定められていることなど、違いは歴然である。しかし日本でも少しずつ犬に対しての考え方が変化してきており、社会的地位は上昇傾向にあるだろう。

アニマルセラピーの効果は「生理的効果」「心理的効果」「社会的効果」の 3 つに分けられており、一般的な認識の“癒し”だけではなく、認知症・鬱の改善や不登校の児童・矯正教育施設等での活動の効果に加えて、犬と一緒に暮らしていくことで、より良い生活へ変化していくことが分かった。このことからドッグセラピー及びアニマルセラピーは、今後の活躍に期待ができる。しかし現在よりも認知度を上げていくには、セラピーによる効果を広めるだけとはいかない。日本が海外に比べてドッグセラピー及びアニマルセラピーが消極的な理由のひとつとして、犬の社会的地位が低いからと考えた。これらを解決していくことで、犬に関して発展途上である日本が、先進国と呼ばれる日は来るのではないだろうか。